

鎌倉古道

なごやの

をさがす

池田 誠一

【3】

萱津東宿から中村へ…幻の都市の萌芽

1 萱津の東宿

名古屋が登場する鎌倉街道の紀行文の中で、最も有名なものは『東関紀行』でしょうか。この紀行は1242年、歌人でもあった源親行が京から鎌倉に旅した時の紀行とされ、その中に「かやつの東宿」の様子が描かれています。要約すれば、その日は市の日にあたり、里も響くばかりに賑やかで、村人は手に手に土産を持っていた…とあります(図1)。この部分は、鎌倉時代の宿の賑わいを描いた有名な一節になっています。

その萱津の東宿はどこにあったのでしょうか。鎌倉街道は前回紹介した萱津の宿から東南に庄内川を渡りました。大河が増水した時の船待ちで出来る宿は、川の両側に必要になります。萱津宿も、拡大して庄内川の対岸に

東関紀行〔部分〕

萱津の東宿の前を通ぐれば、そこの人あつまりて、里もひびくばかりにのりあへり。今日は市の日になむあたりたるどぞいふなる。往還のたぐひ、手ごとに、むかしからぬ家づと(土産)も、かのみてのみや人にかたらんとよめる花のかたみには、ようかわりておぼゆ。

花ならぬ色香もいらぬ市人の徒ならでかえる家づと
尾張の因熱田の宮にいたりぬ。……

古今集:素性「みでのみや人に語らぬ桜花手ごとに折りて家づとにせむ」

図1 東関紀行の中の萱津東宿の記述

東宿と呼ばれる宿ができ、東から西に向かう旅人の拠点になっていったのではないのでしょうか。

萱津から東南に庄内川を渡った名古屋の中村区に、宿跡町や東宿町という町名があります。今では静かな住宅地ですが、そこに中世には賑やかな宿があったのでしょうか。その面影を追ってみたいと思います。

2 東宿と中村

(1) 明神社と女郎墓

今のような堤防のなかった当時の庄内川は、大雨で何度も氾濫し、流路も変えていたと想像されます。そのためでしょうか。今の中村区の庄内川付近には中世の宿の存在を確かめるものは見当たりません。ただあるとすれば、ひとつは明神社、いまひとつは「女郎墓」と呼ばれるものです。明神社は鎌倉時代に東宿の鎮守として創建されたとされる社で、今の東宿町にあります。

もうひとつの女郎墓は、東宿の西の旧古堤新田内、今は宿跡町の墓地にありました。当時の宿には遊女とかくぐうと呼ばれた旅の人を慰める人達がいまいました。尾張名所図会に描かれた「萱津古駅」の図はそんな女郎のいる宿の風景を示しているようです(図2)。

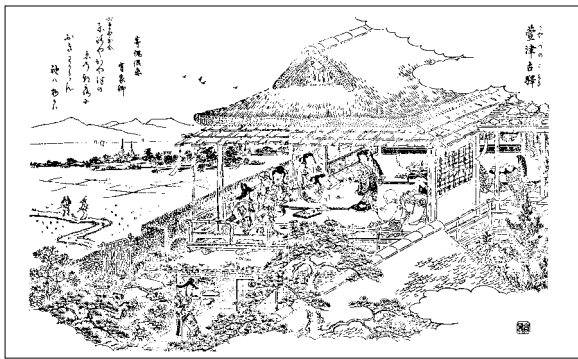


図2 尾張名所図絵(江戸後期の萱津宿のイメージ)

(2) 東宿村から上中村へ

明治時代の地図を見ると、明神社の南側が東宿村の中心になっています。ここは萱津の宿から東南に川を渡った位置にあたり、方向は間違いのないといえそうです(図3)。

その東南は隣接して中村になります。中村は、熱田と並び10世紀の『和名抄』からそのまま続く数少ない地名で、古くから庄内川の自然堤防上に出来た集落のようです。中村といえば豊臣秀吉の生まれた所です。しかし徳川政権下では表に出せず、むしろ隠されたような所があり、豊国神社などに顕彰されたのは明治になってからでした。このためか、出生地についてもいくつかの説があり定まってはいません。鎌倉街道はこの中村の近くを東南に向っていたと考えられます。

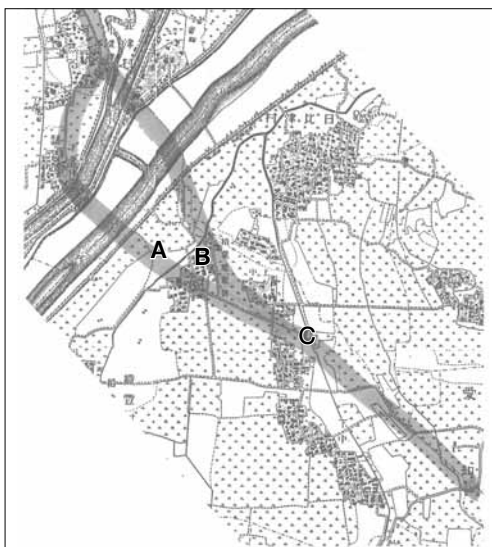


図3 萱津宿(左上)と東宿(中央)。太線は街道の想定ルート

(3) 小栗街道

この辺りから南の鎌倉街道は小栗街道とも呼ばれています。小栗とは説教節や歌舞伎で有名になった「小栗判官」のことです。判官は瀕死の状態です。伊豆から鎌倉街道を西に、最後は熊野の湯峰まで連れられて行きました。その道筋が人口に膾炙されたため、その経路の中に小栗街道と呼ばれている所があるのです。

中村公園の東南、昔庄内用水が流れていた所に小栗橋という名の橋がありました。鎌倉街道はこの辺りを通っていたというのが定説で、街道さがしのひとつのポイントです。

(4) 鎌倉街道のルート

萱津の宿から庄内川を渡って東南に進むルートについては一つの大きな手がかりがあります。しかし、中村よりも南を中心にした話になりますので次回に送ることとし、ここでは鎌倉街道(小栗街道)は、東宿と呼ばれる所から上中村を横切り下中村の少し東側を通っていた、という程度にしておきます。

3 鎌倉街道をさがす

それでは街道をさがしつつ東宿から中村にかけて歩いてみましょう。前回の終点になった市バス豊公橋バス停からすぐ東の信号を南に入ります。少しカーブしていますが、この道は庄内用水の西井筋跡の道になります。二つ目の信号を右に入り、少し行くと右側に墓地があります。この墓地は、今は普通の墓地ですが、昔は地元で「じょろばこ」と呼ばれた



女郎墓と伝えられる墓地。中央に大木の下部が残っている



東宿村の中央部の街並

女郎墓の跡とされる所です。(図3、A)。

バックして用水跡の信号に戻り、まっすぐ東に進みます。付近は昔の東宿村の中心部になります。信号を過ぎて少し行くと左に東宿明神社があります(図3、B)。鎌倉時代初期に東宿の鎮守として創建されたといえます。

神社の正面の道を南に進むと、少し行った広い道は中村公園の南側を通る道になります。街道は東宿からは東南東に進んだと考えられますが、宅地内になるので東に進み、中村公園付近の秀吉の史跡に寄ってみましょう。

公園正面から豊国神社に入り、本殿の右に回ると豊公誕生地の碑があります。ここが出生地の候補の一つ目です。東に進むと公園を出た所に太閤山と名付けられた常泉寺があります。ここには秀吉の産湯の井戸や手植えのヒイラギがあり、出生地候補の二つ目です。寺の南に回ると、隣接して加藤清正が自らの出生地近くに移設したという妙行寺があります。寺の前の道は公園の南側の道で、東に進むと、信号で交差する道が庄内用水の中井筋(惣兵衛川)跡になります。



明神社。左手前に東宿の史跡案内板が立っている



豊国神社内の豊公誕生の地の碑。

左に神社本殿が見える



庄内用水の小栗橋の跡。街道は写真正面方向に向っていた？

右に曲って用水跡を進むと4本目に交差する道が昔小栗橋の架っていた所で、足下に小さな記名があります(図3、C)。街道は先ほどの東宿から宅地内を斜めに通り、この付近に出たのではないかと考えられます。名古屋市内の鎌倉街道は全体的には西北から東南方向に斜めに進んでいました。そのため近代になって東西・南北に区画整理された宅地開発の中で多くが消えていったのです。

街道の跡を追って南、東と進みます。小栗橋の1本南の広い道を左に曲り、交差点を越えると左は日赤病院になります。ここはその前にあった遊里ヶ池の時に縄文時代の壺が出土しました。

街道から離れますが、そのまま少し足を延ばすと信号から2本目の角は昔の中村遊廓の中になります。大正12年、中区の大須から遊廓が一斉に移転しました。その規模は3万坪と東京の吉原を超えるもので、中村は一大歓楽街になりました。戦後の法規制で、今では10軒程の大正建築が残る街です。

南に進むと斜めに曲って遊廓跡を出ます。道なりに行くと幹線道路(太閤



太閤通を南に入った付近。街道は住宅地を斜に横断している(通)を渡ります。この渡った少し先が鎌倉街道の通っていた所と考えられますが、もちろんその跡は全くありません。ここから先もしばらく街道は住宅地の中に消えてしまいます。少し南に行くと、その次の信号交差点が千成通でバス停があります。今回の鎌倉街道さがしはここまでにしておきます。

*

中村に来たので街道と離れて秀吉の旧跡を回って地下鉄駅に戻ります。交差点を西に曲って千成通を300mほど行くと左に公園が見えます。入ると日吉公園で、その東部分に**日の宮神社**があります。ここは古くは日吉権現といい、秀吉の生まれる時母が男子が生まれるようにと日参した所で、日吉丸の名はここから出たといえます。

千成通に戻り、西に2つ目の信号を右に曲ると、その先に**中下八幡**が見えます。源為胤の創建という古い神社です。その少し東には正賢寺があります。神社の横を北に進むと、公園の次の道の左奥に**薬師寺**が見えます。この寺は秀吉が小田原の陣の後中村に立ち寄った時に拝んだ寺といわれます。その奥には、



日の宮神社



大盤振舞いをしたといわれる道路(?)

当時日吉が手習いしたという光明寺もありました。さらに北1本目の左には、秀吉の母の菩提寺という**西光寺**があります。

寺を過ぎて2本目から3本目にかけての右側は秀吉の実父、木下弥右衛門の屋敷(**弥助屋敷**)があった所とされています。ここが秀吉出生地の三つ目の候補地です。そしてその北の道を左に曲った所は、小田原の陣の後、清正と秀吉で**大盤振舞い**をした所といわれています。このようにいろんな伝説の残るのはこの付近の「中」中村で、出生地も本当はこの中中村だったようです。その道を西に行くと右側に地下鉄中村公園駅のバスターミナルがあります。

4 都市の萌芽

奈良や京都といった都を除くと、日本に都市というものが芽生えたのは中世の末、室町時代のようなようです。そのころ経済の発達とともに、全国のあちこちに、港町、門前町、宿場町、城下町等が生まれ始め、育ち始めたと考えられます。東宿も、「市」と「宿」を備え、名古屋の中では熱田(社・湊)と並んで最も早く街が形成されかけた所ではなかったでしょうか。

しかし残念ながら、前回は触れたように、室町時代の末には清須城の城下が栄え、北側に枇杷島を通る新しい街道ができました。そして次第に東宿も人通りから外れていったのです。頼朝や西行の歩いた街道も、都市の芽の出かけた街角も、今は想像力の世界になってしまいました。

〈主な参考文献〉

- ①玉井幸助校訂「東関紀行 海道記」(1935、岩波文庫)
- ②区政15周年記念協賛会「中村区史」(1953、自費)